

# 高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報  
編集人 田村佐起三

〒604-1800-1  
京都市中京区木屋町通三条上ル  
電話 (075) 222-1181

## 《世界が見た日露戦争②》自由社歴史教科書より

「アジア人の反応」暫くして私(孫文)は船でアジアに帰ることになりスエズ運河を通ると沢山の現地人が私が黄色人種であるのを見て非常に喜んだ。「以前は我々東亜の黄色人種は西方の白色人種の圧迫を受け苦痛をなめた。だが今度日本がロシアに勝ったと言う事は当方民族が西方民族に打ち勝ったことになる。日本人は戦争に勝った。我々も勝たなければならぬ。だから我々は歓喜する。」と。日本がロシアに勝った結果アジア民族が独立に對する大いなる希望を抱くに至ったのです。孫文が觀察した日露戦争へのアジア人の反応でした。独立への意欲を掻き立てる孫文が觀察したことを世界中の独立運動の指導者が自ら語っています。印度のネールは「もし日本が最も巨大なヨーロッパの一国に對してよく勝利を博したとするならば、どうしてそれを印度がなし得ないと言えるだろうか?」と書きました。

## 京都文化博物館

7月10日～9月9日

### 《三十周年記念展―平安博物館回顧展》

平成三十年に京都文化博物館は三十周年を迎えました。当館の前身の一つが、昭和四十三年に古代学協会が開館した平安博物館です。世界的視野に立ちつつ、平安文化という特色あるテーマを掲げた博物館活動を展開し、国内外の考古発掘調査、『源氏物語』や『七条令解』など多数の重要資料の収集・調査で大きな成果をあげました。本展覧会では平安博物館がかつて展示された貴重な資料の数々や研究成果を回顧するとともにその設立・運営にあたった古代学協会の歴史と最新の活動、さらに同協会を率い古代史を考古学と文献学の両面から総合的に研究する古代学の発展に尽力された角田文衛博士の没後十年にあたり氏の仕事などを紹介します。

## 私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

### 《GHQ焚書図書開封／西尾幹二著》

前号までに本紙に掲載したようにGHQは検閲やラジオ放送を通じて日本国民を洗脳した。そして「焚書」も行った。「GHQ焚書図書」とは一体何であったのか?著者西尾氏が渾身の力を振り絞ってその実態を解説。先人が歩んだ道程や感情を抹殺する国際法に違反する蛮行を知らせてくれる。GHQは戦前に我国で出版された書籍の中から自分達の統治に都合の悪い書籍を七千タイトル以上も選り秘蔵裏にそして完璧に没収し「焚書」を行った。それは戦前の日本を否定し決して連合国に刃向かうことのない従順な日本人を作るためであった。本書は戦前の日本は「軍国主義」に染まった悪の帝国と教えられた現在の日本人をその呪縛から解放し必読の書である。徳間文庫1～6にて発行。

## 土口哲光和尚の説法

### 《連れもて行こう》

ガンで胃を全摘してから、食べ物が食道から腸に直通する。食事時によく困難が生じる。胃という消化機能が無いので食道と腸の間で食べ物がよく詰まる。詰まると、その苦しさに暫くは喘ぎ続ける。この苦しい体験から普通に「喉を通る」食事ができる喜びをまずもって感謝しなければと思う。術後、三年半年を超えて、それまで健康体の我が身は、病苦の人々との会話に気付きが薄かったことである。この頃、進んで活発に語り合うおり、さりげなく「食べておられますか?」との声かけをしている。食べ物避けられない大事な生命のエネルギー源で、人の生涯を左右する。天地の恵み、仏の慈悲のもとで生かされているもの同志、和歌山弁で「連れもて行こう」である。

## 季節の家庭料理 田村 真紀

### 《七月 すぐきのソテー夏野菜ソース》

梅雨時期から夏にかけて、すぐきは脂が乗り、美味しさの旬を迎えます。  
《作り方・四人分》  
すぐき四切(キッチンペーパーで軽く水分を押し塩コショウし、薄く小麦粉をまぶしておく)・オリーブオイル大匙一 【夏野菜ソース】★(大きめの胡瓜一本・小さめのトマト二個・青じそ十枚・みょうが二個)・新玉ねぎみじん切り大匙三・塩小匙一・オリーブオイル大匙三・レモン汁小匙二  
★の野菜を全て三ミリ角に切り、新玉ねぎみじん切り・調味料を合わせて夏野菜ソースを作る。フライパンにオイルを入れ中火で熱し、すぐきを皮目から入れカリッとしたら裏返して弱火にし両面こんがり焼く。皿に盛り夏野菜ソースをかける。

## つれづれの記

山崎 辰巳

### 《今知己陳ーコンチキチンー》

祇園祭で賑わう京都。一九八二年七月、「京都に新しいムーブメントを」と若い人たちが立ち上がった。当時の京都商工会議所副会長・塚本幸一氏が京都を拠点にするクリエイターや企業人を束ねて若いエネルギーを集め、祇園囃子のコンチキチンになぞらえて「今、己(京都)を知り陳べる」との想いで名づけた(今知己陳イベント)。音楽やシンポジウムなどが展開された。今や絵師として名高い木村英輝氏、本誌編集人でサキゾーグール代表の田村佐起三氏もメンバーだった。たしかに京都は豊富な観光資源で賑わっているが、この活況がいつまでも続くとは限らない。今一度、若い感性とパワーで次の時代を創り出す活力ある新たなムーブメントの起り来たらんことを願うものである。